



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アイヌ文化に着目した自然環境再生活動の展開過程：チコロナイの事例を通じて
Author(s)	淀野, 順子; Junko YODONO
Citation	社会教育研究, 22, 61-82
Issue Date	2004-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28556
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_P61-82.pdf



アイヌ文化に着目した自然環境再生活動の展開過程

— チコロナイの事例を通じて —

淀野 順子

はじめに

環境危機が様々な形で表出し、環境問題の解決が叫ばれるようになって久しい。

近年、環境問題及び付随する諸問題を克服する戦略として、Sustainable Development が提唱されることが多くなった。今日、環境と開発を論じる際には必ずといっていいほどこの概念が使われるほどである。しかしこの Sustainable Development という概念については、解釈が様々で確定した理論がないことに加え、多くの場合、現在の社会を基礎とした上で戦略としての Sustainable のあり方について議論しているに過ぎない。

そこで本論は新たな Sustainable Development 理論の構築のための第一歩として、環境運動の展開過程およびそこに含まれる環境学習過程の把握と、自然環境再生の論理を明らかにすることを目的とする。

環境問題の解決に深く関わる環境思想の主要な流れは、人間中心主義から、生命中心主義や生態系中心主義を含む人間非中心主義へと移り、それまでの人間中心主義的なあり方をいかにして克服するかという問題が大きなテーマになりつつあった。しかし、人間中心主義と人間非中心主義を対立させるのではなく、環境問題における人間社会の問題や、自然と人間の営みのかかわりに関する問題へと関心を向ける流れも見られ、このような流れの中で、Sustainable Development が提唱されるようになってきている。

Sustainable Development という概念が浸透しつつある現在においても、一般的に自然保護と人間の営みとは対立的に捉えられ、自然保護と地域の開発・発展は概ね衝突すると考えられている。これに対して、地域住民の生活の論理に基づいた環境保全を主張する「生活環境主義」が提唱されている。しかし、問題が地域住民生活者だけのものではなく、自然とのかかわりが深いはずの人たちが開発を呼び、むしろ、かかわりが少ない人たちが自然保護を叫ぶという逆説的な構図があるため、この生活環境主義だけでは、自然と人間の営みのかかわりに関する環境問題の解決は困難であろう。さらに、長期的視野に立った地域の発展を考える際、この理論は明確な指針を出しているとは考えにくいように思われる。

自然と人間の営みのかかわりを考える際に、近代文明の中では必ずしも Sustainable な関係が得られなかったことをふまえ、伝統的社会や先住民に注目することが多くなってきた。これは、伝

統的社会の中に、結果的に環境保全的な効果を持った仕組みが偏在し、自然と人間の営みのかかわりが比較的安定的な Sustainable な関係を取り結んでいた社会が多く見られるためであろう。このような中で、伝統的文化を中心に据えた Sustainable Development の理論構築の必要性を説く者¹が出てきた。

筆者は、自然と人間の営みのかかわりを考える際には、人間の本質的な営みの意味を探究する必要がある、そのためには人間の活動の総体である文化に着目する必要があると考える。しかし、統的社会や先住民族の持つ複雑で多様な自然と人間との営みとのかかわりを、断片的に抜き出し、特定の価値観に沿うものだけを切り取り、安易に近代化された現在の社会と対比し、理想化することは問題であろう。なぜならば、現在表出している問題は現代社会に成因し、さらに人びとの生活様式と相互に規定し合っているからである。

そこで本論では、北海道の伝統的文化であるアイヌ文化に依拠した環境運動に着目し、歴史をふまえた上で、運動に関わる人びとが現代社会に生活しながら、その中で自然と人間の営みのかかわりについてどのような理論を構築していったかを探る。

環境運動は「なぜ自然環境を守るのか」という問いに常に立ち向かわなくてはならず、特に都市における環境運動に対しては痛烈な批判がなされる場合がある。これについて、近年の環境運動を捉える研究では、自然との関係性が「切れた」²状態にある都市住民の環境運動は、新たな自然との関係性を構築しようとする試みであり、自分自身と自然・社会との再構築であると捉えることも多い。平取町の自然環境再生をめざす環境運動が、大阪を中心に展開してきたということも、このような文脈に位置づけることができるだろう。

そこで本論では、チコロナイの活動を、人間と自然との方を捉え直しながら、これまでのかかわり方を可能としてきた自然環境を再生させようとする活動であると捉え、自然環境再生活動と設定し着目する。ここでは自然と人間とを繋ぐものが文化であるという仮説の上で、論を進めたい。

1. 平取町の概要

1) 自然概要

本報告の対象である「ナショナルトラスト・チコロナイ（以下、チコロナイ）」が、ナショナルトラストによって森林を再生させようとしている土地は、北海道沙流郡平取町二風谷に存在する。

平取町は、道央日高の西端、沙流郡のほぼ中央に位置し、町の中央を延長 104.2 km の一級河川沙流川が貫流している。この沙流川は、大小 109 の河川を擁し、日高町、平取町、門別町を通り太平洋に注いでいる。

平取町は沙流川流域沿いに 17 の集落が形成されており、そのうちのひとつが二風谷である。

北海道は 100 年ほど前までほぼ全域が原生林であり、現在の平取町がある沙流川流域の大森林の

様子を伝える文献は多い。また平取町のある日高地方では、原生林が落葉広葉樹のなかに針葉樹がモザイク状に入り交じるといった特徴があったため、沙流川流域には樹種がアイヌ語地名となっている例がかなりある。

しかし、明治前期から多くの和人が開墾入植したことをきっかけに木材の伐採が盛んになり、昭和に入ると製炭業者が残っていた樹木を皆伐同様に切り尽くしたため、昭和20年代には山麓の原生林がほぼ全滅した。昭和30年代には残っていた広葉樹が切り出され、拡大造林政策により代わって主にカラマツが植えられたため、奥地の原生林も消滅した。

現在、平取町の約86%を占める森林は、国有林4,1519 ha、民有林21,343 haである。このうち民有林の内訳は、人工林8,556 ha、天然林12,056 ha、その他731 haで、人工林のうち、標準伐期以上に達するカラマツ林は4,208 haとなっている。民有林の大半はM社所有林で、これは明治時代「北海道国有未開地処分法」が施行され、M社などが平取町の多くの山林の無償払い下げを受けたためである。

2) 地域構造

平取町には約100箇所の遺跡と、21箇所のチャシ・コッ遺跡群が存在し、最も古い岩知志遺跡第1地点、荷葉第IV遺跡、紫雲古津第I遺跡らは、北海道の縄文時代のうち最も古い紀元前5000年頃の所産であるとされている。

平取町は町名がアイヌ語に由来するだけでなく、今日沙流川沿いに住むアイヌ民族の祖先が口承によって18代もしくは16代まで遡って記憶されていることなどから、この地域には長らくアイヌ民族が生活していたと考えられている。

平取町の人口は6,503人(2000年国勢調査)で、そのうち二風谷の人口は483人(1999年1月現在)である。二風谷の住民のうち7割がアイヌ民族の血を引いているとされ、二風谷は世界で最もアイヌ民族の占める割合が高い地域であると言われている。平取町では明治40年に、和人がアイヌ民族の人口を上回ったとされている。このアイヌ民族は、それまでの和人による抑圧に加え、政府の同化政策により、独自の文化伝承をできない状況に追い込まれるなどしている。

平取町の基幹産業は農業および建設業、林業である。二風谷においては農業の他、アイヌ文化に関する民芸品販売などが行われている。

農業での特色は、日高管内随一の米作の他、「ニシパの恋人」を統一ブランドとして全道一の生産量を誇るトマトなどがある。また、酪農においては、ブランド化して販売している「びらとり和牛」を中心に微増している。

林業は豊かな森林資源を背景に基幹産業として発達したが、近年は低価格外国産材の輸入量増大、パルプ業界の景気低迷などにより衰退を続けている。また、戦後造林されたカラマツなどの人工造林地が伐採期を迎えているが、林業を巡る環境の厳しさや林業従事者の減少と高齢化などにより、

生産活動全体が停滞している。

建設業には、町の中央を貫流する沙流川に建設された二風谷ダムの建設を中心とする沙流川総合開発事業が大きく影響している。現在、沙流川には河口から約21kmの平取町二風谷に二風谷ダムが存在している。

この二風谷ダム建設については、アイヌ民族の文化享有権をめぐる土地収用に関する「権利取得裁決及び明渡裁決取消請求」訴訟が、二風谷住民であるK氏、KS氏により起こされた。これについて、「アイヌ民族は先住性をもつ民族」であること、「民族固有の文化を享有する権利（文化享有権）を認める」こと、それにより国がダム建設で失われるアイヌ文化についてほとんど配慮していなかったことから「強制収用裁決とそれに先立つダムの事業認定は違法であると認定する」一方、収用裁決の取消という訴えそのものは棄却する事情判決が出されている。

3) 文化活動

平取町内の特徴的な文化施設には、平取町立二風谷アイヌ文化博物館（1992年開館）のほか、私費を投じて集めたアイヌ民族の道具などを展示する私設の萱野茂二風谷アイヌ資料館がある。また、二風谷ダム建設に伴い沙流川歴史館が建てられており、ここには沙流川流域の遺跡から発掘された土器などが展示されている。

文化活動が行われる施設としては、アイヌ民族が居住する地域に建てられる施設である生活館がある。二風谷生活館は北海道ではじめて建てられたもので、現在までに2回の改築を経ている。

平取町内の文化活動は、公民館で行われる文化活動と、それ以外で行われる文化の振興・伝承活動との2つに大きく区分できる。

このうち公民館で行われている文化活動は、大正琴やパソコン教室などのカルチャースクール的なものが主であり、アイヌ文化に関わるものは行われていない。

平取町内でアイヌ文化の振興・伝承活動を行っている団体には、ウタリ協会平取支部、アイヌ文化保存会、アイヌ語教室、FMピバウシ、二風谷観光振興組合、二風谷企業組合、チコロナイ、山道グループなどがある。これらのうち二風谷企業組合では、国有林からシナヤオヒョウの払い下げを受け、皮を剥ぎ、アツツシを織り、販売する材料としている。また、山道グループには「沙流川を守る会」「アイヌ語学校」など、多岐の活動を行なうグループが内部に存在している。

小学校などでは、総合的学習の時間を利用して、地域文化を学ぶ時間が設けられており、二風谷小学校では「ハララキ活動」としてアイヌ文化に着目した活動が1997年から行われている。この活動におけるアイヌ文化の着目の仕方は、児童に対して民族的な意味を持つアイヌ文化としてではなく、地域文化の一つとしてである。現在ではこの取り組みに対する地域の理解が深まっているが、活動がはじめられた当初は、地域からの疑問の声が聞かれたという。

平取町全体を見ると、学校における文化学習は、必ずしもアイヌ文化に着目しているわけではない。

2. 自然環境再生活動の展開過程

1) 活動概要

チコロナイは、ナショナルトラストによって私有地の山林を買い取り、また土地所有者と保全契約を結ぶなどの森林回復の活動を通して、北海道を本来のアイヌモシリ（人間の大地）として再生しようとする運動である。また、これらの活動により、かつてのアイヌ民族の自然と調和したアイヌプリ（生活のしかた）を学び、侵略と人権抑圧の歴史をふまえて、アイヌ民族とシサム（和人）とが友好を深めることを目指すとともに、アイヌ民族の精神や生活、文化を、回復し伝承していく活動の発展に寄与したり、「人間本来の真に豊かな生活」を考え直す契機としたいとしている。

ナショナルトラストとは、日本の場合、「野放図な開発から自然環境や歴史的環境が破壊されるのを未然に防止するため、住民や自治体を中心になって広く国民から基金を募って土地などを買い取り、あるいは寄贈を受けて保存・管理・公開する運動」³とされている。多くのナショナルトラスト運動では、自然環境保護や文化財保存を唱えていることが多いのに対し、チコロナイでは自然環境の保全に加え、それらの再生およびアイヌ民族の精神、生活文化の回復・伝承や、自然と人間のかかわり方や文化などを考えることが目的とされている点が特徴的である。

このチコロナイの森の植物は、アイヌ文化の伝承のために使うことがチコロナイの中で認められているが、寄付をした人には散策と労働の権利しか与えられていない。

チコロナイ部会 活動の目的（GEN会報より）

北海道の各地は、本来、アイヌ民族が自然と調和して暮らしていた“アイヌモシリ”（人間の静かな大地）でした。大地と自然は、アイヌ民族の生活の場である“コタン”（村）から、“コタンコロカムイ”（村を守る神しまふくろう）の住む森、そして“カムイミンタラ”（神々の遊ぶ庭）に続き、“カムイワキ”（神々の住む山）に至る一体のものでした。しかし、約500年前からの和人の侵入、略奪、森林伐採による自然破壊が起こり、今なお進行しています。

1993年の「国際先住民年」を契機に、1994年12月からの「世界の先住民の国際10年」に向けて、私たちは、いま、一つの運動を始めました。北海道の各地で、とりあえずナショナルトラストによって私有地の山林を買い取り、また土地所有者と保全契約を結ぶことによって、この自然破壊の流れにストップをかけ、本来のアイヌモシリとして再生していく運動です。

『チコロナイ』とは“私たちの沢”という意味で、昔、沢すじを中心に森の恵みをうけて生活していた地域を表しています。私たちは、この森林回復の活動をとおして、かつてのアイヌ民族の自然と調和した“アイヌプリ”（生活のしかた）を謙虚に学び、侵略と人権抑圧の歴史をふまえて、アイヌ民族と、本来の意味での“シサム”（良き隣人）とが友好を深めることをめざします。これは、アイヌ民族のアイヌプリの精神と生活、文化を回復し伝承していく活動の発展に寄与するとともに、シサムにとっても、“人間本来の真に豊かな生活”を考え直す契機となるでしょう。

2) チコロナイの活動と論理

(1) 活動前史

このチコロナイは、大阪の市民団体「緑の地球ネットワーク（以下、GEN）」の一部会として活動を始め、後に独立してNPO法人となった。ここでは組織体の区別を明確にするため、独立前であるGENの一部会としてのチコロナイを「チコロナイ部会」、独立後の「ナショナルトラスト・チコロナイ」を「トラストチコロナイ」、「チコロナイ友の会」を「友の会」、「NPO法人ナショナルトラスト・チコロナイ」を「NPOチコロナイ」として区別して表記する。なお、この活動全体を示す際には「チコロナイ」を使用する。

ここではチコロナイの活動内容をもとに、展開過程を活動前（～1993年8月）、準備期（1993年8月～1994年12月）、部会活動期（1994年12月～1999年6月）、独立活動期（1999年6月～2002年）の4つに区分して記述する。（表1）

チコロナイにはK氏の父親であるKT氏の遺志が強く関係している。しかし、このKT氏は、具体的な活動の目的などについて示しておらず、また、実際に活動を行っていたわけではない。だが、このKT氏の遺志およびKT氏の存在抜きには、後のチコロナイを考えることはできない。

KT氏は「日本人化した代表的なアイヌ」民族である父親と、和人でありながらも「アイヌ的」に伝統を守る母親の長男として、現在の平取町に生まれた。KT氏はアイヌ民族に対する差別を感じながらも、教育と経済的な豊かさを得る努力をしていたが、ある長老が死を前にしてもアイヌ民族の本性を失っていないことを知り、アイヌ民族の復権のための多くの活動に携わるようになる。そして1980年代には、二風谷ダム建設に反対したり、M社有林を地元のアイヌ民族に返還するよう求める書簡を提出するほか、自生林を育てるための山林購入、中国で植林を行う団体への寄付、道内で行われているナショナルトラストを視察するなどの活動を行った。

つまり、KT氏という問題の渦中に入らざるを得なかった地域住民である個人が、その問題に付き、これまでのアイヌ民族の歴史を捉えた上で、その解決のための方法としてナショナルトラストに興味を持ち、それらの可能性を探っていたのである。

しかし、KT氏は病気を抱え、自ら活動を行うことが難しかったことに加え、最大の理解者である息子のK氏が、既存のナショナルトラスト活動が問題や限界を抱えていると考えていたり、KT氏の活動に違和感を覚えていたため、KT氏の考えをそのまま実現することは非常に難しい状態であった。

このKT氏は1992年に亡くなり、K氏らが編集委員となり、KT氏がM社の社長に送った書簡や、自然を守るためにナショナルトラスト運動をしたいと話すインタビューなどを掲載した遺稿集が1993年に発行された。

同時期、中国やネパールにおいて主に植林を行う「緑の地球ネットワーク（以下、GEN）」が大阪に設立された。このGENは準備会発足と同時に、中国山西省大同市（当時、雁北地区）の黄土

表1 年表

期	年	GEN/チコロナイ	平取
活動前	1988		・KT氏, 二風谷ダム用地買収に応じず北海道収用委員会で申し立て意見を陳述
	1991		・KT氏, K氏などと道内ナショナルトラスト数カ所視察
	1992	・GEN発足会開催 ・北海道での植林事業実施の提案 ・GEN正式発足	・KT氏, 逝去
	1993	・T氏が植林事業調査のため北海道に入り, 二風谷でKT氏の遺稿集を読み, K氏にGENによる活動を打診	・K氏ら「二風谷ダム裁判」提起 ・KT氏の遺稿集発行 ・K氏, 「二風谷フォーラム'93」開催
準備期		・T氏がGEN会報でナショナルトラストによる北海道での緑化協力活動の開始を呼びかけ	
	1994	第1回二風谷ワーキングツアー開催 (以降, 毎年継続)	
部会活動期		・チコロナイ部会発足 ・ナショナルトラスト第1期募金活動開始 ・チコロナイ学習会開始 (以降, 月1回継続)	
	1995	・チコロナイアイヌ語講座開始 (以降, 月1回継続) ・ナショナルトラスト第1期の募金活動終了 ・ナショナルトラスト第2期募金活動開始 ・第1期寄付金により土地買い取り, 登記 ・秋の二風谷ツアー実施。	
	1996	・KS氏講演会「自分史を語る」開催 ・ナショナルトラスト第2期の募金活動終了 ・ナショナルトラスト第3期募金活動開始 ・春の二風谷ツアー実施 (以降毎年継続) ・チコロナイ子どもキャンプ実施 (以降, 毎年継続)	
	1997	・チコロナイ通信の独自発行開始 ・映画「樹海」～天然林を育てる～上映会 ・講演会「北国の森林」～そこに生きる生物たち～開催 ・K氏講演会開催	
	1998	・NPO法人GEN認定 ・チコロナイがGENから分離独立	
	1999	・木彫り, 刺繍教室開催	・K氏, O氏, NPO申請準備開始
独立活動期	2000	・1日体験教室「やさしいアイヌ語」「アイヌ古式舞踊を踊る」開催 ・講演会「チコロナイを語る」開催 ・チアサンケ前夜祭で倉本聴講演会開催	・T氏が大阪から二風谷に移住, 針灸治療院を開設
	2001	・NPO法人「ナショナルトラスト・チコロナイ」認定 ・ナショナルトラスト第3期募金活動終了 ・第2期, 第3期寄付金により約12haと約3haの山林を購入 ・第2期買い取り地にミズナラの木(7500本)を植林	
	2002	・第1回総会開催 ・アイヌ料理教室開催	
		・植林地の下草刈りに平取町森林組合などが協力 ・林道整備にM建設が協力	

高原での緑化協力活動を開始している。このGENの活動を通じて複数のメンバーが、中国における自然破壊が日本の行動によって引き起こされたものであることや、中国と北海道での自然破壊の構造が同様であることに気付いた。そのため、国際先住民年が開始される直前という時代背景もあり、北海道でアイヌ民族に着目した植林などの活動を行うことが、問題意識を持ったメンバーによって提案され、T氏がその可能性を探るため、二風谷を含む北海道数カ所に調査に入るようになった。つまり、GENの活動が発展する中で、社会的・歴史的背景のもと、北海道における活動を展開する必要性が問われたのである。

このGENメンバーの持った問題意識とは、問題の起きている地域ではなく、その問題を引き起こした地域外の住民の一部としての視点から問題を把握したものであった。

この活動の可能性を探る調査のため、T氏はまず平取町二風谷に入り、そこでKT氏の遺稿集を読んでKT氏の遺志を知った。その後T氏は、札幌近郊に残る原生林や富良野の東大演習林、阿寒湖畔の森林、知床、釧路湿原など数カ所を見てまわったが、二風谷にはGENの活動として取り組むに値する問題と、活動の発展性があると考え、二風谷で活動をしたいと考えた⁴。

こうしてT氏は、国連の「国際先住民年」にあわせ、K氏などが呼びかけて行っていた「二風谷フォーラム'93」⁵が開催されている二風谷へ再度足を運び、K氏に自然を守る活動の協力を申し出た。

このころK氏は、二風谷ダム建設に反対していたKT氏の運動を受け継いでおり、運動を通じて、ダムに反対するだけでなく、何らかの形でダムの不要性を表明しなければならないと考えていた。しかしK氏は、これまでの自らの経験⁶からこの申し出を快諾せず、「自己満足では困る。何年も続けて地元の人が受け入れるようになってこそ本当の運動ではないか。最低でも10年は続けてもらわないと同意できない」と話した上で、準備期間を置くように伝えた。このK氏の考えに対し、GEN設立に携わった経験を持つT氏も同意⁷したことから、GEN内部に準備会が設置されることとなった。

以上のように、T氏という媒介者によって、KT氏・K氏という問題の渦中に入らざるを得なかった地域とその住民と、地域外の視点を持つGENとの活動がつけられた。つまりチコロナイはその組織が設立される以前から、問題を地域内・地域外が共有し、異なる両者の視点から問題を共有し、その解決のための実践を行う組織になるための土台が築かれていたのである。

(2) 準備期

GEN内部に北海道での活動組織設立のための準備会が設立され、この中で活動目的やその内容、運営方法などが決められることとなった。この準備会は約4回開かれたほか、インフォーマルな話し合いが数回持たれている。

T氏を中心とした準備会のメンバーは、K氏の考えを踏まえた上で、活動の主体になるべきアイ

ヌ民族であると考えており、「国連先住民年の10年」にちなみ、10年間を目処にGENから独立させ地元に戻せるような組織を作りたいと考えていた。そのため準備の多くを大阪で行うものの「活動の主体は地域住民である」という考えに基づき、K氏の意見を尊重して進めている。

準備会では組織形態そのものについても話し合われた。準備会に参加したある人は、全国的に大規模な活動ができる大きな組織にしたいと意見を述べた。しかし、T氏は「地道に小さいものから一步一步発展させる方がよい」と考えており、なおかつ新しい組織が実際に活動していけるのか予測をつけられなかった。そのためK氏にアドバイスを求めた上で、当面はGEN内部の一部会として活動することとし、将来の活動の主体が二風谷住民になるよう、現地世話人として二風谷住民であり地域について理解しているK氏を位置づけた。

活動内容を決める際には、「M社の森をアイヌ民族に返して欲しい」とするKT氏の遺志についての話が出され、その方法としてナショナルトラストを行う可能性が話し合われていた。しかし一部のメンバーからは、アイヌ民族に森を返すことには同意するものの、ナショナルトラストという方法ではなく、国が責任を持ってM社と交渉するように要求する運動のほうがいいのではないかと、意見が出された。これは当時、朝鮮半島における従軍慰安婦に対する見舞金の問題⁸があったためだろうとT氏は推測している。準備会が発足した翌年の1月にはT氏を含む3名が、具体的な活動などの相談のため、二風谷でK氏と話し合いを持ち、この頃、KT氏の遺志を尊重してナショナルトラストを行うという活動の内容がほぼ決定した。3月頃には、K氏から、ナショナルトラストによる活動をする際「個人に権利を与えないこと」という条件が出されている。

同年8月にGENでは第1回二風谷ワーキングツアーを開催した。この時のツアーでは本の紹介などはするものの、講演会・話し合い・歴史の勉強などは一切なかったため、現場で各個人が様々なものを自由に感じ取っていた。このツアー終了後、参加者から学習会開催の提案があり、T氏も同様の思いを抱いていたため、「ハルコロの会」⁹に参加するなどして、学習会開催の準備をはじめている。

ツアーの後、準備会では、組織の名称を何にするかについて、GEN内部およびK氏やT氏が話し合いを重ね、将来地元に戻せる組織作りをするために、二風谷のアイヌ民族であるKS氏に相談して決めることにした。そしてK氏からKS氏に、「アイヌのお年寄りが聞いてピンとくるような名前」を相談して、その意味¹⁰が組織の目的に合う「チコロナイ」という名称に決めた。

こうして、「チコロナイ部会」がGEN内部に位置付くことが決定し、「チコロナイ部会」は、ナショナルトラスト活動を行う「ナショナルトラスト・チコロナイ」と、会員の交流やナショナルトラスト活動を支援する「チコロナイ友の会（以下、友の会）」の2つの組織から成り立つことになった。

この準備会では、最終的には組織を財団法人化することや、M社の山をチコロナイに寄付してもらうことなどを目標とした。そのため、その後の活動でチコロナイが購入した土地は、M社と隣接

している場所が多くなっている。

以上に見られるように、チコロナイ設立の準備は大阪を中心に行われていたが、K氏の意見がT氏らを媒介者として準備会に提案されているなど、チコロナイ設立には、GEN・K氏それぞれの活動を通じて得られた地域内・外双方の考えや、組織運営のノウハウが生かされたと考えられる。

また準備期を通じ、チコロナイについての基本的な方針がメンバー内で共有された。特に、基本的方針のうち「主体は地域住民」という考え方が共有された意味は大きい。準備期間に地域内・地域外の視点が存在することで、双方の考え方異なる場面は多々見られた。しかし、地域外の考えに対しK氏が違和感を覚えた場合は、T氏を通じてK氏がそれらの違和感を準備会に伝え、地域内・外双方が考えの差異を共有した上で、おおよそ場合K氏の考えが尊重されたため、双方が対立することはなかった。もちろん全ての差異が汲み取られ、活かされたわけではない。しかし、「主体は地域住民」という考え方は、地域内と地域外の信頼感を深め、さらにこの考えが共有されたことは、その後、チコロナイが一貫した目標のもと活動することができた大きな要因のひとつとなっているのである。

こうした準備期を経て、チコロナイはチコロナイ部会というGEN内部組織として活動を開始することとなる。このチコロナイ部会の設立は、GENがglocalな活動団体に発展したことを示しているとも言えるだろう。

(3) 部会活動期

準備会を経てGEN内部に設立されたチコロナイ部会は、第1期のナショナルトラストを開始した。この活動はGENだけではなく、福岡の「シサム通信」、東京の「先住民年ニュース」などの市民グループを通じても拡げられた。第1期はバブル経済の最中という時代背景もあり、想像以上に簡単にお金が集まり、この寄付金で二風谷に3.4775 haの山林を購入した。この山林は、35年ほど前に植えられたカラマツがまばらに残る雑木林で、M社の森とは隣接していない¹¹。

土地購入の他、第1期寄付金で、KT氏の娘であるA氏の山林約21 haを保全契約地として契約した。この保全契約地とは、すぐにその土地を購入する費用はないが、将来購入する可能性がある地を保全するために契約するものである。山林の持ち主の多くは、固定資産税や維持費が負担となり、山を手放すことに繋がってしまう。そのような状態を減らすため、保全契約として維持費の一部を負担することで、森林の保全に協力してもらうことを目的としている。

第2期では、3年間で328人から5,602,453円の寄付金が集まった。寄付金が集まった時点では適当な山林が見つからなかったため、すぐに山林を購入していない。

第1, 2期はチコロナイ部会として実施されたが、第3期は独立をしたため、「ナショナルトラスト・チコロナイ」として実施している。

またチコロナイ部会では、これらの活動の他、「秋の二風谷ツアー」「チコロナイ子どもキャンプ」

表2 ナショナルトラストへの寄付状況

	期 間	寄付者数	金額 (円)	寄付者内訳
第1期	1994.12.10～ 1995.12.9	269人	4,054,870	近畿55% 北海道16% 関東13%
第2期	1995.12.10～ 1998.12.9	328人 (484件)	5,602,453	北海道47, 東北7, 関東64, 中部21, 近畿153, 中国10, 四国8, 九州18 (単位:人)
第3期	1998.12.10～ 2001.11.22	215人	3,106,367	
合 計			12,763,690	

「春の二風谷ツアー」などのツアーや、学習会、講演会など、活動を拡げて行くようになった。

このうち学習会は、「第1回二風谷ワーキングツアー」参加者によって大阪で月1回開催されるようになった。この学習会はチコロナイの活動ではあるものの、GEN内部の組織として会計を行うと複雑になるため、独立会計で運営されている。この学習会以外にも、アイヌ語講座、ワーキングツアーなどの行事は、ほとんどが独立会計となっている。

学習会では、アイヌ民族の歴史や民族学、アイヌ民族の自分史などに関する講演会の開催や、民族学博物館見学、アイヌ語、アイヌ料理教室、森林や二風谷ダム裁判についての学習などを行っている。このうちアイヌ語については、年間を通じてしっかり学習したいというメンバーからの申し出により、後に「アイヌ語講座」が月1回開催されるようになった。

この学習会・講座への参加者は常時10人程度だが、学習会等のお知らせをGEN会報に載せているため、希望者は自由に参加することができる。

この学習会では、チコロナイ自体を知るための学習だけではなく、アイヌ民族の歴史、アジアの先住民族に関する問題、二風谷ダム裁判の判決、アイヌ語に関するもの、アイヌ民族の生活文化・伝統文化の体験など、多岐に渡る学習をするとともに、それらをより深めるため、講演会の開催や、民族学博物館見学、アイヌ料理教室、アイヌ文様刺しゅう教室などを行っている。

チコロナイ部会に関する報告やニュース、学習会等のお知らせなどをGEN会報『緑の地球』に掲載していたが、GEN会報が各月発行になったことを期に、学習会の欠席者に次回の学習内容を知らせる必要があったことから、「チコロナイ通信」が毎月発行されるようになった。

表3 チコロナイ学習会 学習内容

年	学 習 内 容
1995	<ul style="list-style-type: none"> ・学習会の計画, 相談 ・ナショナルトラスト・チコロナイの主旨と今後の方向 ・イヤでもわかるアイヌ語—アイヌ語に秘められたおもしろい話, 深い意味— ・ビデオ鑑賞『共生への道』—日本の先住民族・アイヌ— ・二風谷ワーキングツアーの報告 ・日本とロシアによるアイヌ民族侵略の歴史 ・国立民族学博物館見学と大塚和義教授のお話 ・アジアの先住民族問題について
1996	<ul style="list-style-type: none"> ・KS氏講演会 ・子供キャンプとワーキングツアー報告 ・秋のアイヌ料理第2弾の計画立案 ・講演会『自分史を語る』
1997	<ul style="list-style-type: none"> ・チコロナイに関する情報などの交換, 1997年の学習計画 ・ビデオ「倉本聡, カナダ・ハイダの森の教え」 ・「楽しく特別授業『松浦武四郎まっふ』を活用, 名寄中学」, 北海タイムスの記事 ・筏井里絵「見て, 聞いて, 感じて, 考えたこと」 卒業論文「日本人の中に生きる『アイヌネノアンアイヌ』」より ・二風谷ダム裁判の判決を読む ・アイヌと日本の昔話の「語り」と絵本の紹介 ・K氏講演会と交流会 ・中国新疆の錫伯(しば)族およびその言語の現状
1998	<ul style="list-style-type: none"> ・「アイヌの踊りと小学校での取り組み」踊り指導と報告 ・三重県の松浦武四郎記念館見学 ・KS氏のアイヌ神話集成紹介, ・二風谷のウポポ, 古式舞踊, イナウづくりのビデオ鑑賞 ・現地報告 ・チコロナイの森の植物たち」 ・ビデオ「アイヌ文化に学ぶ」 ・個人報告, アイヌ文化体験交流集会打ち合わせ ・弁天町市民学習センター催しアイヌ文化体験交流集会参加
1999	<ul style="list-style-type: none"> ・「京大アイヌ・沖縄を考える会」活動, アイヌモシリツアー報告 ・多言語国家ネパールの言語運動の波について ・「ナショナルトラスト・チコロナイの新しい組織」について相談 ・タケノコ堀りと焼き肉パーティー

以上のチコロナイ部会の活動は大阪を中心として展開されている。これには大阪には同和問題があることに伴い人権意識の高い住民が多いことや、大阪には札幌や東京ほどアイヌ民族に着目した団体がなく、メンバーが集まりやすかったことが考えられる。

このチコロナイ部会は、設立当初から10年を目処に現地に組織を移すことや法人化が目標とされていたが、GENのNPO法人化を期にチコロナイとしてGENから独立することになった。

これに伴い、第3期募金活動のためのリーフレット¹²が作成され、タイトルが「アイヌ・シサム友好の森」から「アイヌ・シサム 共に歩む森」に変更されている（事例1）。この事例1は、「主体は地域住民」という考えに基づきながら、アイヌ民族とシサムとの話し合いの場の設定をしてお互いが異文化を理解することと、地域内外で問題を捉え、それらを共有しつつ問題解決のために活動を進めた例の一つと言える。

事例1 タイトルの変更 —友好の森から共に歩む森へ—

チコロナイでは、活動への理解を促すことと賛同者を募るために、リーフレットを作成しており、そこにタイトルをつけている。

第1期募金活動の際はチコロナイのサブタイトルとして、「アイヌ・シサム 友好の森」を使用していた。しかし、第3期募金活動では、タイトルが「アイヌ・シサム 共に歩む森」に変更されている。このタイトルは第1期募金活動のときにT氏によって考えられたものである。

K氏はこのタイトルがつけられた当初から違和感を覚えてはいたが、一気に削除を求めるとそれまでの過程を否定することになると考え、状況を見て、リーフレット作成の際にタイトルの変更を提案した。ここでのK氏の違和感とは「友好と言うと別々の組織が友好をはかろうという感じがする。アイヌとシサムは同じ日本に住む者同士なのだから、別々な扱いをしない方がいいのではないか。」という考えからきている。

GEN設立から関わっているMG氏も「友好という言葉ではアイヌとシサムが別のものであるというような印象を受ける」と、K氏と同様の意見を持っていた。

T氏はK氏の発言を聞き、自らが同和教育に力を入れていた時を思い出し、「まっとうな日本の社会であれば、自分が贖罪意識により森林をアイヌの人たちに返さなければならない状況をつくらなくて済んだ。自分は活動をやっているという自己満足だ。20年前から進歩していないな。」と感じたという。

K氏の提案は、T氏などを通じて大阪の事務局に伝えられ、「地域の意見」を重視する形でK氏の意見が受け入れられ、タイトルが変更されることとなった。

以上のように、部会活動期はチコロナイとしての活動が多様に発展した時期である。発展した例としては、まずナショナルトラストとして二風谷に山林を購入したことがあげられる。この山林の購入により、チコロナイの目的の一部が達成され、さらに今後これらに関わるの第一段階を経たことになる。

さらに、学習会をはじめとする学習活動も、非常に大きな意味を持っている。

学習会では、多岐に渡る学習活動を通じて、アイヌ民族に着目した社会的排除の構造を多角的に捉えられるようになってきている。そのため学習会に参加した会員は、自然環境についてだけでなく、アイヌ民族に対する理解を深め、自然と人間の営みのかかわりについて考えるに至っている。自然と人間の営みのかかわりについて考えることは、学習者自らが社会的排除の構造内に存在していることの自覚につながっており、この自覚は、チコロナイの基本方針である「主体は地域住民」だけでなく、問題を抱える地域とそこに関わる「自分自身も主体である」という視点を大きく育てている。この視点が育つことにより、社会的排除の構造をより深く理解するだけでなく、学習者が自らの生き方自体を問うことにも繋がっている。

このことから、部会活動期において自主運営である学習会の学習者は「学習の主体」となったと言えるだろう。

つまり、部会活動期における学習活動は、活動を通じて人々の交流を促進することに加え、チコロナイの活動理念の追究を深め、「地域が主体」という考えが、世話人だけではなく会員にも浸透する役割を担うことで、チコロナイがさらに多様に展開することを支援していたといえる。

(4) 独立活動期

GENから独立したチコロナイは、「ナショナルトラスト・チコロナイ（以下、トラストチコロナイ）」と「チコロナイ友の会（以下、友の会）」の2組織によって構成されることとなり、世話人としてT氏、現地世話人としてK氏が位置づけられた。チコロナイが独立することには、チコロナイを「地域の組織」にするという意味が込められている。

新しい組織となった友の会は、大阪に拠点としての事務局を置き、独立前にチコロナイ部会で行われていた学習会は、友の会の一活動として位置づけられ、継続されることとなった。また、事務局が関わる主な活動である「チコロナイ通信」の発行は、友の会会報として微妙に役割を変化させ、続けられることとなった。

この友の会事務局であり学習会のまとめ役だったT氏は、2000年3月に、大阪から二風谷に家族で移り住んだ。この時T氏は事務局を大阪のメンバーに託し、自らはチコロナイ通信の発行などを二風谷で行うことになった。このT氏が二風谷に移住してから、二風谷では、毎月1回「チコロナイの森」の散策が行われている。

このT氏の転居は、友の会の独立以上に、活動に大きな影響を与えているように思われる。

T氏の転居以前は、大阪の事務局において「チコロナイ通信」の発行作業が行われていた。しかしT氏が転居する際、組織を「チコロナイ友の会・大阪（以下、友の会大阪）」「チコロナイ友の会・関東（以下、友の会関東）」に分け、主な執筆はT氏が行い、編集・製版作業を友の会関西が、印刷・発送は友の会関東が東京で行うこととした。この分業は手間はかかるものの、連絡を密にする必要があることから、それぞれの意志疎通を意識的に行うことに繋がっている。

表4 チコロナイ友の会会員数

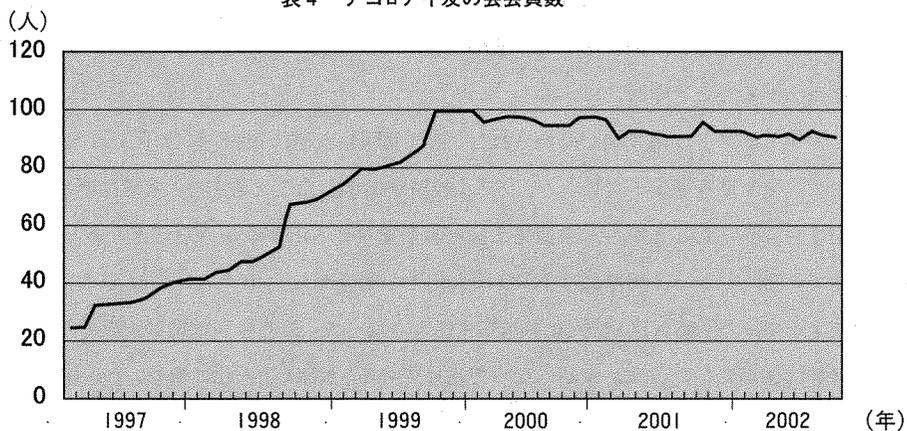


表5 チコロナイ学習会 学習内容

年	学 習 内 容
1999	<ul style="list-style-type: none"> ・じっくり体験 木彫りと刺しゅう アイヌ文化に触れてみよう! ・「ナショナルトラスト・チコロナイ チコロナイ友の会」について ・夏の「二風谷宿泊研修会」報告 ・「松浦武四郎の足跡をたどる旅, 知床」 ・アイヌ文様の刺しゅう
2000	<ul style="list-style-type: none"> ・チコロナイ学習会の今年の計画 ・KM氏のアイヌ語弁論大会原稿「スケアン ロー イペアン ロー」を読む ・3月の二風谷, 「天神崎の自然から学ぶ集い」参加報告 ・春の植樹報告, アイヌ文様の刺しゅう ・アイヌ文様の刺しゅう, 中国旅行報告 ・夏の現地宿泊研修会報告 ・アイヌ文化よもやま話し
2001	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ文様の木彫り ・1年の反省とこれからの計画 ・たけのこ掘りとバーベキュー ・春の二風谷ツアー「山菜採りとアイヌ料理」報告 ・アイヌ文様の刺しゅう ・夏のワーキングツアー報告
2002	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌの木彫り ・1年間の反省と来年度の計画 ・「刺しゅう展」について相談 ・アイヌの刺しゅう, 「刺しゅう展」に向けて ・夏の報告 ・アイヌ料理の調理・会食と交流

このT氏の転居後も、大阪の学習会はそれまでの他の固定メンバー7、8人により、計画・立案が引き継がれ、学習活動が続けられている。T氏の転居により、学習会がT氏の手から放れ、友の会の組織が拡大するなど、結果として、他のメンバーが学習の主体としてさらに成長する契機となり、活動が広がることとなった。

ナショナルトラストは第3期が開始された。第3期開始当初は1998年12月10日から2000年12月9日までの2年間で予定していたが、バブル経済が崩壊したこともあり、当初目標としていた400万円が集まらなかったことから、当面集まったお金で買える山がなかったこともあり、期間を1年延長させている。しかし、実際にはNPO法人化との関係から2001年11月21日までとなった。

トラストチコロナイはNPO法人化を目指すこととなった。この申請準備は大阪ではなく、K氏と当時二風谷に住んでいたO氏が中心となって進めている。NPO法人化に際し、ナショナルトラストは「NPO法人ナショナルトラスト・チコロナイ（以下、NPOチコロナイ）」が行い、その他の事業については任意団体である友の会に託すこととなった。

このNPOトラストチコロナイは、「地域の組織」になるような工夫がされている。その例としてはK氏の理事長就任や、NPOチコロナイ役員のほとんどをK氏が推薦し、その意見が尊重されたこと、目的に「アイヌ」という言葉を必要最小限にしか使用しなくなったこと（事例2）などがあげられる。

NPO ナショナルトラスト・チコロナイの目的（定款より）

この法人は、アイヌ民族がかつてその恵みを受けて暮らしていた自然林を再生、保全し、それを後生に引き継ぐことにより、自然と人間の、アイヌ文化を学ぶと共に、環境の保全を図ることを目的とする。

事例2 地域に受け入れられるように

NPO申請前までのチコロナイは、アイヌ民族の歴史や文化を前面に出したリーフレットを作成していた。しかし、NPO法人化の際、活動の目的に「アイヌ」という言葉を必要最小限に使用するとどめ、さらにリーフレットのタイトルであった「アイヌ・シサム 共に歩む森」を削除した。

このような変化を求める提案はK氏が「アイヌを前面に出すと、地域の人は特にチコロナイに入りにくい。」と発言したことにはじまっている。K氏はチコロナイの現状を「地元の人には完全に受け入れられていないと感じ、「アイヌ」という言葉を最小限使用することで、地域の抵抗を減らし、理解を得ながら地域に根付く運動にしたいと考えていた。

提案を聞いたT氏は、「自分がよかれと思ってしていたことが、地域にとってはそうではないのだ。」とショックを受けたが、同時に「『アイヌ・シサム』と書かなくても当たり前になったということで、なおかつ、それが地元を受け入れられやすいということなら良かった。」と思い、K氏の提案を受け入れている。

K氏は役員人選の際、NPO チコロナイを全国的な組織にするため、全国に役員を置きたいと考えており、その観点を持ちつつ、役を受けてくれそうな人に打診した。このうちMS氏は、チコロナイの活動歴はないものの、個人的な交際を通じて互いに信用しあっており、地域からの信頼もあるため、「地元住民が役員に入っていた方が、近い将来チコロナイが広まる可能性がある。」とK氏が考え、就任を依頼している。

表6 NPO ナショナルトラスト・チコロナイ役員

	役職	その他	年代・性別	活動参加開始	居住地
K	理事長		50代・男	1993年	平取町
T	副理事長	友の会事務局	50代・男	1993年	平取町（大阪）
MG	理事		60代・男	1993年	大阪
MS	〃		50代・男	2001年	平取町
B	〃	友の会関東	30代・女	1993年	東京
O	〃（事務・会計）		40代・女	2000年	平取町（岡山）
M	監事		50代・男	2000年	札幌

※ NPO 申請当時・かっこ内は移住前の居住地

NPO 法人取得申請中に、チコロナイは平取町で倉本聡講演会『北海道で考える』～森と人間の～を主催した¹³。この講演会は NPO 登録申請記念として行ったもので、二風谷で毎年 8 月 20 日に開かれているチバサンケの前夜祭として位置づけられた。この講演会には平取町の複数団体から協賛を受けており、これにより地域の理解を得ることや、地元での知名度を上げることが目的の一部だったことがうかがえる。

2001 年 11 月 22 日に NPO 登録された NPO チコロナイは、法人として、任意団体「友の会」と協力して活動を行うこととなった。この NPO 発足と同時に T 氏から O 氏への会計引継ぎが行われ、振込先や預金通帳などの全てを切り替えている。

2002 年 1 月 8 日には、第 2、3 期募金活動の寄付金により、NPO 法人名で 15 ha の土地を購入・登記し¹⁵、森林 21 ha の保全契約を結んだ。

同年 5 月には NPO チコロナイの単独事業¹⁶として 4 日間に渡り植林が行われ、北海道から四国までの延べ 192 人により、第 2 期買い取り地の 3 ha にミズナラ¹⁷7,500 本が植えられた。この植林事業には、K 氏からボランティア協力を依頼された地元の M 建設¹⁸などの協力を得ている。この植林後の 6 月には、NPO チコロナイ独自の会報第 1 号が発行された。

同年の 7 月と 8 月には、5 月の植林地の下草刈りが延べ 48 人のボランティアによって行われた。しかし、この下草刈りでは 30 a しか刈ることができず、270 a が残ってしまった。K 氏は、「チコロ

おわりに

以上、アイヌ文化に着目した環境運動の展開過程と、それらがもたらした自然環境再生の論理の現段階を概観してきた。

運動の展開過程は、問題を押しつけられ抱えざるを得なかった地域と、都市の住民という地域外の交流をきっかけに運動が具体化し、協働の取り組みの中で地域内外それぞれの運動のノウハウを活かし運動を進めるとともに、問題を抱える地域の内発的な発展となるような支援を地域外が行うことで、自然と人間の営みのかかわり方を再構築しつつ環境を保全するという意識を地域外の住民が深めるとともに、そのような再構築を行える組織を地域内に形成しようとするまでの過程であった。

このことを可能としたのは、平取町という問題を抱える地域の住民であるK氏を理事長とするナショナルトラスト・チコロナイと、主に地域外の住民が関わるチコロナイ友の会という2つの存在であろう。

まず1つめの、ナショナルトラスト・チコロナイは、民族・人権・経済的問題など複数の利害関係を持つ非常に複雑な問題を抱える地域の住民であるK氏が中心となることで、問題の表明自体が難しい地域での問題解決を図ろうとする運動の柱を強固なものにしている。さらにこのK氏はそれまでの二風谷ダム裁判等の経験により、問題を地域で表明し解決しようとする運動によってもたらされる新たな問題を熟知しているため、その地域の持つ非常にデリケートな問題をふまえつつ、地域の将来像を考えた上で、地域の真の発展のためにはナショナルトラスト・チコロナイの運動が必要であり、その運動が地域に根付き、地域住民主体で行えるようにするためにはどうすべきかをも考えることができている。

2つめのチコロナイ友の会であるが、人権意識の高い大阪の環境団体がチコロナイの設立に深く関わったこともあり、チコロナイは設立当初から環境問題の成因に深く関わる社会構造に着目し、学習会などの学習活動を行うことにより、自らが学習の主体となって、個人としてまた運動団体として問題の解決の道を探ることに繋がっている。

以上のようにチコロナイの大きな特徴は、単なるナショナルトラストにとどまらず、学習活動とナショナルトラストとが連携して行われているということである。

これらの展開を地域づくりの学習過程のモデル²⁰から事例を振り返ってみると、チコロナイ友の会などの活動において、①ネットワークに支えられた地域集会活動、②地域調査学習、が行われ、その結果をナショナルトラスト・チコロナイで③地域づくり実践に活かそうとしていると考えられる。しかし、チコロナイの活動は、まだ地域に根付いたものとはなっておらず、地域内で①②が積極的に行われているとは言い難い。そのため現段階においては、③および④地域計画づくり、に移行する段階であると言える。

次に活動を通じて構築された自然環境再生の論理についてであるが、この活動は設立前の調査時から①自然と人間の営みのかかわりを考えるために文化に着目し、多角的な学習によって、②環境保全的な文化を守ることが環境保全に繋がることを確認している。しかし文化が継承できない環境に陥っているという現代社会においては、それらをもたらした社会構造を視野に入れた上で、③文化継承のための自然環境の再生が必要であり、再生の展開過程およびその結果、④自分自身と自然とのかかわりを再構築し、⑤活動団体が社会全体に自然と人間の営みのかかわりを再構築することを促している、ということが分かる。

ここでの文化の捉え方は、一部の人びとにとっては伝統的なアイヌ文化である場合もあるが、おおよそ人間が自然を利用してきたという事実をふまえ、「自然環境に負荷をかけない」「狭い地域内での資源循環が可能な」いわゆる Sustainable な要素を持つ風土に依拠した生活文化であると考えられる。

活動の実践者は自らの文化的アイデンティティにとって異文化であるアイヌ文化とそれを持続可能としてきた自然環境の再生を通じて、上記のような文化理解から自分自身の文化の理解へとつなげている。このことは、活動に関わった者が、自分自身が抱える課題・価値観に向きあい、文化的アイデンティティを意識化すると同時に、各々が共有する課題や価値観を発見し、それらの解決に向けて何らかの実践を行うことに繋がっている。これは活動に関わった者の中で職業や居住地を変えている者がいることから明らかである。

以上より、Sustainable Development の理論構築のためには、文化(とりわけ伝統的な生活文化)に着目する必要があると考える。

本報告においては、環境学習過程にそくした個人の文化理解および自然環境再生論理の構築過程、さらにそれらに基づいた文化的アイデンティティの意識化の過程を明らかにすることができなかった。さらに、問題を抱える地域内外の地域特性や歴史的背景、社会構造についての検証、分析も不十分であった。今後はこれらの分析を行い、文化に着目した Sustainable Development の理論構築をした上で、最終的には地域づくりの提案とそのための教育プログラムの作成につなげたい。

注

- 1 ティエリ・ヴェルヘルストは『文化・開発・NGO—ルーツ無くしては人も花も生きられない』新評論、1994において「開発とは、究極的には、文化的とも言うべき総合的な過程であって、経済的活動、政治的決定、団体生活、社会的闘争、技術的手段などに、サンスつまり「意味ある方向」を与えるものこそが、むしろ文化なのである。事実文化こそが開発にその存在意義と目的を与えてくれるのである。何が「良き生活」であるかを決めるのも各民族の文化なのであり、共同体の生活に固有のリズムを刻み、固有の方向性を指示してくれるのも文化なのである。」と述べている。
- 2 鬼頭秀一『自然保護を問う—環境倫理とネットワーク』筑摩書房、1996。
- 3 木原啓吉『ナショナル・トラスト』三省堂、1992.6, p.8

- 4 T氏は「人間のいない自然保護を唱っている地域よりも、自然と共に生きる生活技術が残っている二風谷に魅力を感じ」たことや、KT氏の遺志を継ぎ上げられる可能性があること、北海道における明治期からの森林大量伐採は、現在の金による東南アジアなどの森林収奪の原点とも言えることから、GENの中国黄土高原での活動と同じ位置づけで活動ができると考えた。
- 5 このフォーラムには、11ヶ国27の先住民族約60人と、全国各地から延べ約4,000人が参加した。カナダからは、政府の出資による参加者があった。
- 6 K氏は、地元に入った多くの市民グループは、「アイヌのためとか何とか言って、騒いで、自分たちで報告書をつくって喜んで」ように見え、自己満足で自分たちのやりたいことをやり、引き上げてしまう事が多く、嫌だと感じていた。さらに、これまでの経験上、あまりに意気揚々として、急いで活動をするとう失敗してしまうと考えており、「すぐやってもしょうがない。きちっと話し合いをして、始めなやダメだ。」とT氏に伝えた。
- 8 従軍慰安婦に対し、日本政府は国として正式に謝罪しないまま基金を設立し、募金を募り、そこから元従軍慰安婦に見舞金を支払おうとしたもの。募金により支払うことが国の責任を曖昧にするとの意見があり、また、この基金からの見舞金の受け取りを拒否する元従軍慰安婦がいたなど、物議を醸した。
- 9 岡山県にある、アイヌ語などを学習している団体。
- 10 「チコロナイ」とは、アイヌ語で「私達の沢」を意味する。KS氏の話では、アイヌ民族は、昔、沢すじで川と山との恵みを受けて、その場所にコタンを作って暮らしており、そのような一角をチコロナイと呼んでいたという。
- 11 これは第1期に寄せられた寄付金によって購入できることを第1に考えたためである。この山林は林道との関係で袋小路になっており、なおかつK氏の山と隣接していることもあり、売買契約がスムーズに進行した。土地の売買契約は1995年7月に行われ、登記は1996年1月13日に行われた。この山林はK氏とT氏の共同名義になっている。
- 12 第1期については、リーフレットではなくGEN会報での呼びかけだった。
- 13 この講演会は沙流川歴史館レクチャーホールで開かれた。協賛はチフサンケ実行委員会と平取町教育委員会で、後援は平取町、社団法人北海道ウタリ協会平取支部、萱野茂二風谷アイヌ資料館。日本環境財団の助成を受けて行われた。
- 14 法人許可が下りた11月22日の時点で年会費を納入しても、半年後の4月にはまた新たに会費を納入する必要が出てくるため、事務局では理事およびその他少人数から会費を納入してもらい、他の人には2002年4月から会員になるように手続きをとるため、帳簿は借入金として2001年11月から2002年3月までに納入された会費をプールする方法をとった。
- 15 第1期で集まった募金では3.4haの土地を購入したが、所有者はT氏とK氏の共同名義となっており、税金等の関係上、NPO法人名への書き換えはしていない。
- 16 植林参加希望者の確認などの事務処理を、友の会と共同で行うと混乱が起きるとの考えから、友の会の協力を得ずに、NPOチコロナイ単独で行った。
- 17 広葉樹の植林補助対象樹木はミズナラ、シラカバ、マカンバ、カツラである。チコロナイでは複数樹種を植えたいと考えていたが、ミズナラ以外の苗木が手に入らず、ミズナラのみ植林となった。
- 18 平取町内にあるM建設は、林道の整地を、ブルドーザーなどを使って1日がかかりで無償で行った。K氏のボランティア協力を受け、M建設は「『K氏の顔』で二つ返事」で協力したものの。
- 19 平取町内の子ども達とその保護者に、様々な自然や文化を体験してもらうことと、現在不足している親子のふれあいの機会の提供を行い、親子の豊かな心を養うことにより、家庭教育の向上を図ることを目的とした事業。第7回「自然と友達になろう」には、平取町内の親子16名が参加した。参加者はNPO

チコロナイの山に入り、K氏からチコロナイが設立された経緯や活動内容、意義などの説明を受けたり、散策しながら樹木の学習などをした。

- 20 鈴木敏正『学校型教育を超えて』北樹出版、1997では、地域づくりの学習過程の一つのモデルとして、①ネットワークに支えられた地域集会活動、②地域調査学習、③地域づくり実践、④地域計画づくりという過程が、対抗関係をはらみつつ、相互規定的・螺旋的に発展していくことが指摘されている。